

2005 年度 森村・川村ゼミ議事録

11 月 2 日分

記入者: 藤村百恵

司会者: 石原桃子

日本のアヴァンギャルド 第一回

『グループ音楽からパラメディアへ』

発表グループ

岩永・豊島

議題

1. 60年代に作家たちを反芸術へと突き動かしたものはいったい何だったのか。
2. パラメディアにおける新たな文脈の創造とは？

グループの見解

当時人々を突き動かしていたものは反体制の気質に根ざした、それまでの制度を超えようとする実験的精神であった。しかし作家たちは反体制に縛られたままでは、新たな創作活動を行えないということに気づき、70年代に入ると徐々にそれまでの「アンチ～」の精神とは趣向の異なる表現活動を行うようになっていった。「破壊」ではなく「アディクション」であり、既成のメディアからその新たな使用法を創造することへと移行していったといえる。

(考察より抜粋)

議論の展開

1. 60年代に作家たちを反芸術へと突き動かしたものはいったい何だったのか
実験的精神とそれまでの体制に対する反動の二つが根本的にあった

↓

反芸術だけでは進まない

破壊」から「アディクション」、「パラメディア」へ

○即興音楽と比較してどう違うのか？

- ・グループのような集団でやる場合と個人の場合異なる

刀根さんは集団派

- ・即興音楽はパラメディアとまったく違う

出てくる音が問題ではなく、行為そのものに意味がある

即興音楽

その場でのパフォーマンス重視

その場だけでなく、CD/CDメディア等
をしよう

<p>ポイントは作家が「楽器とどう向かうか」 ex クリスチャン・マークレイ 行為は同じだがメディアの違いによって生まれる →作家の想定範囲内</p>	<p>《変形的な使用》 CDのエラーを意図的に遣って新しい音を出す →作家の想定範囲外</p>
--	---

2. パラメディアにおける新たな文脈の創造(アディション)とは？

- ・既製品を演奏楽器として
- ・使用法の更新
- ・説明書の付け加え
=すべての音は偶然性によって生まれる
CDにシールを貼る行為は人為的ではあるが、
それによってどんな音が出るかは予測不可能である

○刀根さんは即興音楽に対してどのような限界を感じていたのか？

- ・グループ音楽で行ったような一回限りの演奏よりも、どう予測してもわからない音の誕生、音楽の規格性を重視するようになっていった。
- ・ハイテクになればなるほど、よりいっそう予測不可能である
=偶然性=アディション？！

cf、ジャクソン・ポロック

ある程度人為的な動きをとるが、絵の具の滴りはまったく偶然である

パラメディアのスコア(記譜) ≠ グループ音楽

何度でもプレイできる

=親・西洋音楽

パラメディアは反制度の道とは逆に、制度にのっとなってNEWを生み出している

○記譜とは？

誰が作った曲かを記録するのが重視されている

グループ音楽は以下のような典型的な主従関係を破壊したかった



- ・最初で最後のリサイタルは一回でよかった？！
- ・動機は破壊行為のみならず、当時の流行スタイルとも関係している
- ・草月ホールは巨大組織の象徴的な場所でもあった

○刀根さんについてどう思うか

- ・前衛を認めながら、伝統をものみこむキャパの大きさに感心する
- ・職人ではないので常に新しい表現を求め続ける「探求心」
変化を遂げ続けることがアーティストである
→もしかしたら周りからもそう期待されているのではないかと考えると、
それ自体も体制のうちにいるかもしれない。

○ダダがやったような破壊も一つの模索だったのかもしれない…

アンチ～は反体制といった抵抗としか捉われていないが、しかしそれは新しい何かを作るときに力となっている。

○刀根さんの言葉「反芸術は大阪万博に収斂した」(考察より)は

挫折か？それとも、それで力をためこんでいたか？

発表者の解釈：即興に対する挫折でパラメディアへ移行

→もっとポジティブに捉えてもいいのではないか。

「収斂した」とはもっとストイックになったのではないか。『Solo For Wounded CD』で不快だと感じた人もいた事実から、人間に不快感を与えるような音まで生み出して、「気持ちいい音ばかりが音楽ではない」ということを私たちに教えてくれたのではないだろうか。

記入者の考察

4週間に渡るフルクサスを終え、今日から同時代の日本アヴァンギャルド芸術活動に焦点を移すことで、60年代という激動な時代、そしてそれに巻き込まれた人々をよりリアルにとらえるヒントを得られるのではないかと思う。議論の最後で時間切れとなりましたが、「当時の作家たちを突き動かしていたものとは何だったか」という問題は、残りの発表でも意識しながら、もっと探っていきたいと感じました。

私にとって、今回の議論の中で出てきた即興とパラメディアの違いが最も大きい収穫とな

った。今までどちらも私にとって「あまり居心地よくない音」としか思えなかったが、しかし音楽といえども音を目的とせず、その場での作家によるパフォーマンスを重視した即興音楽。また一方で、パラメディアは進歩するテクノロジーを否定するのではなく、「共存」という道を選んだ。それぞれに評価すべき点が多くあり、その当時においては大胆で斬新な行動であったように思える。議論が深まっていくにつれ、自分が今まで「音楽」として捉えていた範囲のせまさを認識したと同時に、音楽という存在は自分にとってどういうものなのかを再考せずにはいられませんでした。「気持ちいい音ばかりが音楽ではない」という言葉は今でも印象的です。